

人工臓器実用化へ院内研究室

岐阜薬科大 長良医療センターで



新設した研究室を紹介する船戸さん(左)と久世さん(右)=岐阜市長良の長良医療センターで

岐阜市の岐阜薬科大が10月から、市内の国立病院機構・長良医療センターでサテライト研究室「生体再現学研究室」の運用を始めた。人工多能性幹細胞(iPS

細胞)から実用的な「人工臓器」を生み出すため、臓器のでき方や培養法などを研究する。iPS細胞由来の人工臓器は、移植などの再生医療

や、新薬の開発での活用が期待されている。ただ、現状の臓器は機能やサイズで、成人の臓器と大きな差があり応用にも限界がある。

研究室によると、高機能な人工臓器が完成すると、コストや時間をかけずに病気の仕組みを解析でき、新たな治療薬の開発につながる期待がある。さらに、移植治療の効果を事前に検証できるようにもなり、再生医療の普及にも弾みがつくという。

6日に長良医療センターであった記者会見後、研究を指揮する同大博士(薬科学)の久世祥己さん(34)は「将来的には人と同じサイズ、機能の人工臓器ができ

れば」と期待。センターで診察を受けている難病患者の治療に役立てられる可能性があり、センターの船戸道徳さん(51)は「医師と研究者の協力を密にしていきたい」と話した。

(大谷津元)